

2006 年度 事業報告書

目次

1	組織.....	- 2 -
	(ア) 会員状況 (2007 年 3 月 31 日)	- 2 -
	(イ) 役員等 (敬称略・順不同：2006 年 3 月現在)	- 2 -
2	会議.....	- 3 -
	(ア) 理事会.....	- 3 -
	(イ) 評議員会.....	- 3 -
3	各事業報告.....	- 4 -
	(ア) トラスト活動.....	- 4 -
	(イ) 自然環境調査.....	- 5 -
	(ウ) 森林維持管理整備.....	- 9 -
	(エ) 普及事業.....	- 13 -
	(オ) 5 センスプロジェクト.....	- 14 -
	(カ) 自然環境の復元や保全活動を担う人材の育成及び環境教育事業.....	- 14 -
	(キ) ボランティア参加による保全育成・調査活動.....	- 14 -
	(ク) その他.....	- 14 -
4	中長期計画.....	- 15 -
	(ア) トラスト活動.....	- 15 -
	(イ) 自然環境調査.....	- 15 -
	(ウ) 森林維持管理整備.....	- 15 -
	おわりに.....	- 16 -



財団法人 C.W.ニコル・アフアンの森財団

1 組織

(ア) 会員状況 (2007年3月31日)

	口数	金額
賛助会員	102 口	5,100,000 円
アフアン会員	740 口	3,700,000 円

(イ) 役員等 (敬称略・順不同：2006年3月現在)

理事・幹事・評議員

理事長	C.W. ニコル	評議員	梅崎 義人
専務理事	森田 いづみ		大熊 孝
常務理事	松木 信義		関口 鉄夫
理 事	大槻 幸一郎		瀬田 信哉
	金子 与止男		武田 徹
	谷 達雄		茅野 實
	野口 理佐子		星野 佳路
	高見 裕一		前河 正昭
	林 秀剛		前田 利彦
	山瀬 一裕		横谷 幸
	アリスター・ドライバー		
幹 事	畠田 洋平		
	吉田 寛		

2 会議

(ア)理事会

日時	2005年5月30日(火) 13:40~15:30
出席者数	理事総数 10名 幹事 2名 出席者数 11名(内委任状 1名)
審議事項	2005年度事業報告(案)について 2005年度会計報告(案)について 2006年度事業計画(案)について 2006年度収支予算(案)について 任期満了に伴う役員再任について 新理事就任について 事業用借地権について

(イ)評議員会

日時	2005年5月30日(火) 15:40~17:00
出席者数	評議員総数 11名 出席者数 9名(内委任状 6名)
審議事項	2006年度事業計画について 2006年度収支予算について 任期満了に伴う役員再任について 新理事就任について 事業用借地権について

3 各事業報告

(ア) トラスト活動

2006年度は、南東側に隣接する山林 7,859 m² (約 2,377 坪) を取得した。(図 3-)

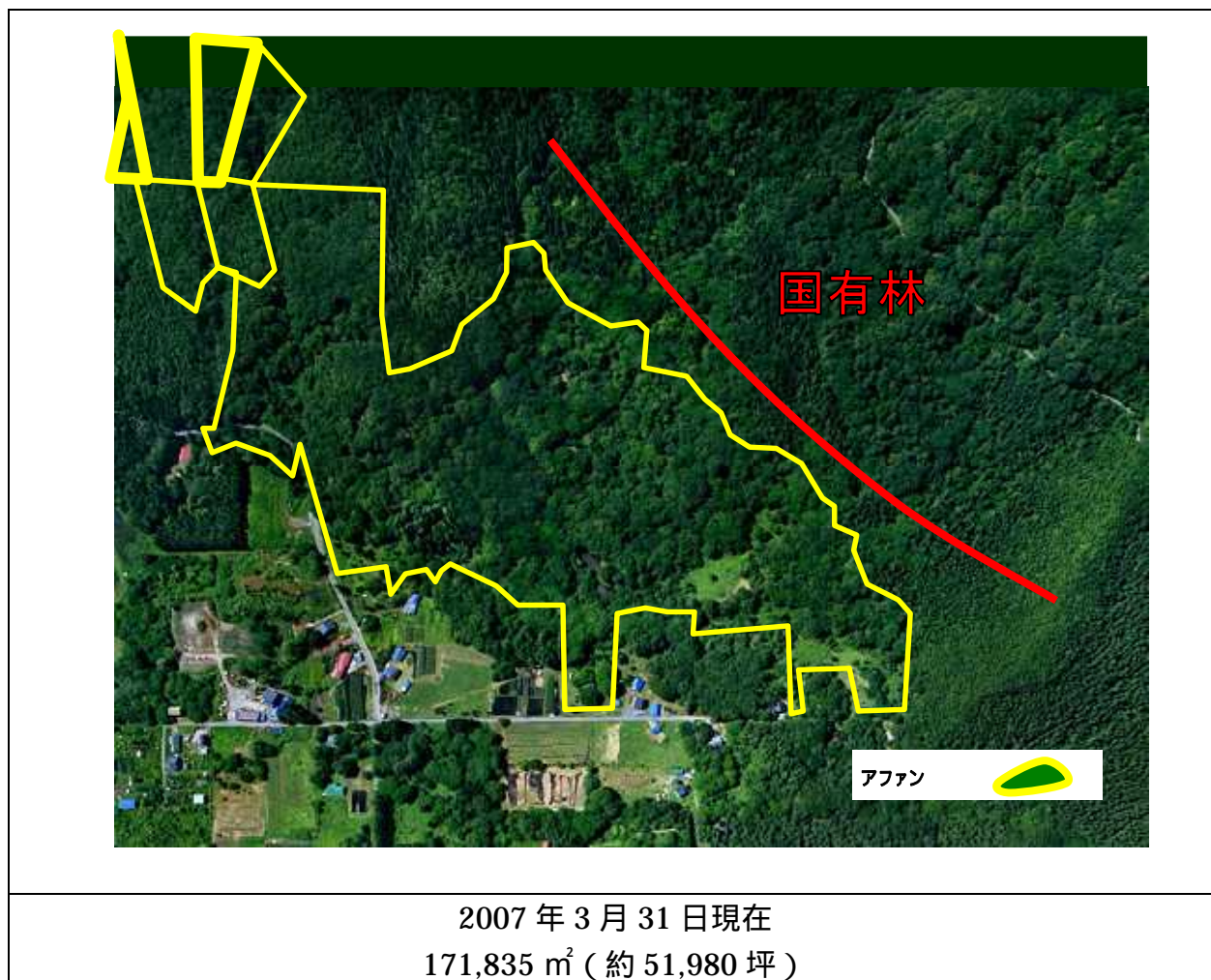


図 3- 今年度トラスト地

3 各事業報告

(イ) 自然環境調査

今年度実施した調査および作業項目を一覧に示した。また、各調査については別紙資料にまとめた。ここでは調査結果の概要と考察できる事項を記す。(表 3-a、3-b)

植物類

昨年度トラストにより取得した地域の植物相を調査し、植生図を改訂した。

2004 年 5 月に植樹した苗木 515 本について生育状況を調べたところ、約 3/4 である 391 本に幹折れや食害などの被害があった。この被害のあった苗木のうちウサギやネズミ類の食害と思われるものは 7.6%と低く、苗木そのものがなくなってしまっている、枯死しているなどは約 25% (1/4) であった。昨年度よりも完全に幹が折れてしまった苗木が多く、被害状況も重いことが分かった。2005 年 12 月の降雪は例年よりもとても多く、被害も大きくなったと思われる。

また、10 月にこれらの苗木の生長度合いを調査したところ、全体の約 58%が良好に成長していた。林内から移植したコナラも、購入したコナラも成長の度合いに大きな変化はなく、どちらも昨年よりも成長度合いは大きい結果(樹高約 40cm、地際直径約 4mm)となった。今後もモニタリングを継続していく。

継続調査として実施しているシードトラップでの堅果類(ドングリ)の生産量調査では、昨年の約 1.5 倍の結実量だったが、そのほとんどが芽吹き期待できないものであった。芽吹き期待できないドングリの約 1/3 にチョッキリ類の痕跡が確認できた。昨年同様トラップを設置(9 月上旬)する以前にチョッキリ類により落とされたドングリが例年よりも多い印象がある。

3 各事業報告

表 3-a 2005 年度自然環境調査項目（植物）

分類	調査項目	実施時期	概要
植物	植生図の改訂 【別紙 資料 1】	-	トラストにより取得した場所の植生を調べ、植生図に反映した。
	植樹苗状況調査（継続調査） 【別紙 資料 2】	6 月	苗木の雪害、食害の状況を調べた。
	堅果類生産量計測（継続調査） 【別紙 資料 4】	9 月 ～11 月	シードトラップを設置し、計測した。
	希少及び資源樹木計測（継続調査）	10 月	胸高直径及び幹周を計測した。
	常設区樹木計測（継続調査）	10 月	立木の胸高直径を計測した。
	植樹苗計測（継続調査） 【別紙 資料 3】	10 月	2004 年 5 月に植樹した苗木の地際直径、樹高を計測した。

3 各事業報告

動物類

今年度は2羽のフクロウが巣箱から巣立った。4年間で合計9羽のヒナが巣立ったことになる。フクロウの繁殖を支える多様な環境が安定して維持されていると考えられる。繁殖期(5~7月)の鳥類相の調査からも昨年度との鳥類相の変化はなく、適度な整備作業により環境が維持されていることがうかがえる。また、キビタキ、ヒヨドリ、イカルがアフアンの森の典型的な種であることが確認された。

ヤマネの巣箱調査より、繁殖には利用されなかったもののヤマネの巣材が確認できたことから、繁殖期にアフアンの森でヤマネの生息が確認できた。一方、今年度もコウモリの利用確認のため巣箱を設置したが、個体や痕跡の確認はできなかった。水環境が豊富でカヤブヨなどが多く生息しているので、コウモリの生育環境の創造という視点から巣箱の利用を考えたい。

ツキノワグマの追跡調査を実施するため、アフアンの森内に捕獲檻を設置したがツキノワグマは掛からなかった。

造成された水路の水生生物調査では、13目26科35種の生物を確認できた。1回の調査で確認された種数としては多いと思われ、トンボ類だけを取ってみても多様な水辺・湿地環境を創出できていることがうかがえる。

3 各事業報告

表 3-b 2005 年度自然環境調査項目（動物、その他）

動物	繁殖期の鳥類相調査（継続調査） 【別紙 資料 5】	5 月 ～7 月	
	鳥類センサス（継続調査）	5 月 ～11 月	センサスにより、種のリストアップを行った。
	鳥類巣箱調査（継続調査） 【別紙 資料 6】	-	常設の巣箱の利用状況を確認した。
	フクロウ営巣調査（継続調査） 【別紙 資料 7】	4 月 ～6 月	巣箱に CCD カメラを設置し映像解析、及び、巣箱に残されたペリットの分析を
	コウモリ巣箱調査（継続調査） 【別紙 資料 8】	7 月 ～11 月	巣箱を設置し、利用度を調べた。
	ヤマネ巣箱調査（継続調査） 【別紙 資料 9】	8 月 ～12 月	巣箱を設置し、利用度を調べた。
	甲虫類トラップ調査（継続調査）	7 月 ～10 月	樹木に設置した墜落缶トラップによる捕獲。
	ツキノワグマの捕獲檻設置	10 月 ～11 月	追跡調査実施のため捕獲檻設置。
	水生生物調査（継続調査） 【別紙 資料 10】	11 月	2004 年に造成した水路にて、水生生物を捕獲しリストアップした。
	定点観測（継続調査）	-	自動撮影装置による観測。
他	地質、地下水調査まとめ 【別紙 資料 11】	-	これまでの実地調査データをまとめ、考察した。
	気象観測（継続調査） 【別紙 資料 12】	12 月	気象観測装置を設置し、気温、湿度、光量のデータを蓄積し始めた。

その他

地質調査をまとめたところ、アファンの地質は 4 種からなり 3 方向から表流水または湧き水が供給されていることが分かりました。【別紙 資料 11】
2005 年 12 月より、常設調査区№1 に気象観測装置（気温、湿度、光量）を設置し、計測を開始しました。また、GIS を導入し、現在これまでのデータを入力中である。【別紙 資料 12、13】

3 各事業報告

(ウ) 森林維持管理整備

本年度の森林整備内容は、これまでどおり必要最低限の施行を実施しつつ、前年秋間伐地への植樹を行なうとともに、2005年度トラスト完了地の整備が中心となった。トラスト完了地より伐採した不要木を有効利用するため、3年ぶりに炭焼きを行なった。また、前年秋間伐材をチップにし、前年に引き続き利用頻度の高い場所へ敷いた。【別紙 資料14、15】

植樹

前年度、間伐地を中心に植樹を行なった。林内からの移植樹種、及び地元森林組合から購入した苗木、合計20種572本を植樹した。

移植樹種は樹高3m以上のものを数本含み、購入樹種は樹齢1~3年生のものとした。

作業は経験のあるボランティアの方々にもお手伝いいただき、4月末から5月上旬にかけて行なわれた。11月下旬にも36本の林内からの移植作業を行なった。



購入苗の植樹作業



樹高3m以上の木の移植作業

3 各事業報告

トラスト完了地の整備

2005年度トラスト完了地 37,788 m²の藪刈り作業を行なった。そのうち約 14,500 m²を中心に、藪刈り後の整理伐・間伐・地ごしらえなどを行なった。この場所は40年以上放置されていたために、立木はつるが絡み付き枯死や幹折れ、形質劣化をおこしていた。

切り出した材は炭焼き・ホダ木として有効利用した。



トラスト地 整備前



トラスト地 整備後



藪片付け作業



片付け作業終了後

3 各事業報告

炭焼き

トラスト完了地の整備に伴い多くの不要木の伐採やナラの間伐を行なう必要があり、材の有効利用として炭焼きを行なった。古い窯を作り直し、オニグルミ・クワ・アブラチャンなどの材で炭を焼き、窯を乾燥させ熱を持った良い状態にし、間伐したナラで本格的な炭焼きを行なった。




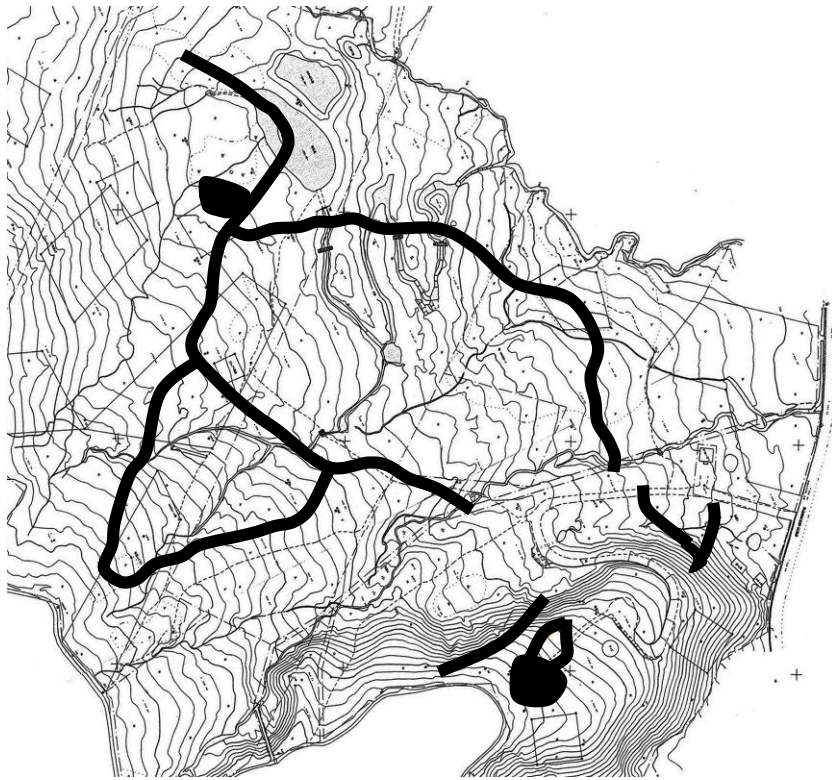
ナラ炭約 900kg を焼いた。

		
窯造り	ナラ材	窯だし

3 各事業報告

ウッドチップ敷き

前年秋の間伐材をチップにし、昨年に引き続き利用頻度が高い場所へチップを敷いた。人の踏圧からの保護、乾燥防止、いずれは森の栄養になるなどの利点がある。新たな場所へもチップを敷き、周遊コースも出来上がった。

		
チップ敷き作業	作業前	作業後
		
ウッドチップ コース		

3 各事業報告

(工) 普及事業

従来のパンフレットによる広報活動の他、取材視察等多数あった。テレビ信州特別番組「里山大回廊に行く」では、アファンの森の1年の様子が、美しい映像で放送された。

また、ホームページをより見やすくわかりやすくするために、デザインを一新した。

2005年度の年次報告を冊子にまとめ、会員・企業へ配布。財団の活動をよりわかりやすく伝えるためのツールとして広報に活用した。

会員向けの見学会も5月～11月に14回行なわれ、192名の方にその時ならではの、アファンの森の様子を楽しんでいただいた。1月には昨年に引き続き2回目となる「会員の集い」を都内で開催した。142名の方にご参加いただき、財団の活動の意義を伝えるとともに、これまでの財団の活動報告及び展示などを行った。調査研究者にもご協力いただき、アファンでの調査の様子を参加者にお伝えすることもでき、アファンの森をより身近に、感じていただく良い機会となった。

フクロウの雛の携帯ストラップを作成し、各イベントで販売を開始した。

	
<p>ニコル理事長が各テーブルを移動して 会員と交流を深めました。</p>	<p>調査研究者による調査内容の説明</p>
	
<p>フクロウ ストラップ</p>	<p>年次報告書 冊子</p>

3 各事業報告

(オ)5 センスプロジェクト

「アファン“心の森”プロジェクト」も3年目の2006年の活動が無事に終了した。

【別紙 アファン心の森活動レポート】

また、大人を対象にした、森の癒しから自身の内面への気付きを含めたプログラムの開発・研究、及びプログラム内容、今後の活動等話し合いが行われた。

(カ)自然環境の復元や保全活動を担う人材の育成及び環境教育事業

今年度も7月22～23日に「リコー親子教室」が、9月8～10日に「リコー森の教室」が実施された。【別紙 資料16、17】

また、地元の一般の方々を対象に、鳥類調査の佐藤氏を中心とした東京農業大学の学生による「鳥の暮らしをのぞいてみよう」が7月16～17日に実施された。地元の親子5組13名参加。色々な動物たちの目線から森を観察し、発見や驚きの2日間であった。

2日間雨と天候には恵まれなかったものの、両日とも全員参加し「雨でも森は楽しい」とあらためて実感できる機会となった。

(キ)ボランティア参加による保全育成・調査活動

財団登録ボランティア、及び支援企業のボランティアの方々に参加いただき、植樹・幼木の手入れ・チップ敷き・トラスト地藪刈り後の片付け・植樹苗計測等行ない、森林整備の必要性、調査の意味を学びながらご協力いただいた。

(ク)その他

飯綱にある「子どもの森幼稚園」の年長の園児が10月アファンの森へ訪れた。この幼稚園ではアファンの森の絵本「森にいこうよ！」を普段から読み聞かせており、森へ来た子供達は、目の前に広がる絵本の世界に驚きと興奮でいっぱいになっていた。小さい頃から森と接する重要性を実感させられる機会となった。

4 中長期計画

中長期計画について今後の課題を以下に示した。

(ア) トラスト活動

50ヘクタールを当面の目標とし、隣接地域へ面積を広げることが今後も進めていく。現在の管理体制で「森の再生」活動が実施でき、人の入場や利用エリアのゾーニングも可能になると考えられます。また、50ヘクタールの連続した豊かな森林環境は周辺地域におけるコアエリアになりえると考えられる。

(イ) 自然環境調査

現状を知るため、また生き物に評価してもらうための調査は今後も継続していく。

今後の森の姿などを描くために、歴史を紐解く調査の実施が必要である。具体的には泥炭層の花粉分析調査や、文献による地域環境の把握等がこれに当たる。

また、生物同士や森林整備作業と環境調査データの関連性を意識した調査内容の検討も進めていく。

(ウ) 森林維持管理整備

今年度取得した土地の整備を実施する予定。

少しずつではあるが面積が広がり、整備の手も入り始めている。将来のアファンの森の姿、人の関わりについて改めて明確にする作業も必要であり、自然環境調査のデータや関わる人それぞれの考えを出し合うことが重要である。そもそもアファンの森はニコル理事長と松木常務理事との多くの議論のうえに成り立ってきた森であり、人が関わる以上必要な作業である。

おわりに

下記の方々には、さまざまな形でご協力いただいた。

石川啓吾氏
川崎公夫氏
佐伯佳美氏
佐藤誠三氏
前河正昭氏
三森典彰氏
山田明義氏

財団のボランティアとしてご協力いただいた皆様
佐藤誠三さんとともにプログラムを実施した東京農業大学の学生7名
日本アムウェイディストリビューターのボランティアとして御協力いただいた皆様
のへら隊（グリーンセイバー有志）の皆様
人と自然の研究所
リコーのボランティアとしてご協力いただいた皆様